

モエの腰を後ろから掴み、そのまま奥まで入れた。

ぬぷっ……くちゅっ……。

大きな胸を後ろから鷺掴みにすると、指の間から肉が溢れる。

「服を脱ぐのすら待てないとか……

先生がお風呂えっちが好きなのは知ってるけどさ、脱衣所で始めるのはちよっと早くない？」

モエが振り返りもしないまま、呆れたような声を出す。

「……まあ、仕方ないか。一回出して落ち着きなよ」

許可が出た瞬間、腰を密着させた。

びゅるっ……!! びゅるるっ……!!

熱いものが子宮口に当たる感覚が伝わる。モエは小さく息を吐いただけだった。

「はい、一発目。これで少しは落ち着いた？」

振り返った横顔は呆れと、少し楽しそうな色が混じっていた。

洗い場のタイルに座らせ、モエの大きな胸に石鹸をたっぷりつける。

スポンジの代わりに、その胸を両手で挟み、自分のものを擦り上げる。

「……くひひ。パイズリして欲しいなら、してあげるのにさ」

モエは苦笑いしたまま、胸を寄せる力加減だけは合わせてくる。そのまま腰の動きを速める。

先が熱くなる。
そのまま谷間で射精する。

びゅっ………！
びゅるっ………！

精液が泡を突き破り、モエの顔に飛び散る。
眼鏡の縁と唇の上に白い筋がかかる。

「……せっかく洗ったのに。また汚すんだ」

モエは顔にかかった精液を拭いもせず、呆れたように息を吐いた。



湯船に並んで沈む。当然、結合したままだ。
モエは眼鏡をかけたまま、湯気でレンズが曇り始めている。

「……ねえ。眼鏡、外していい？」

「そのまま」

「……まあ、先生ならそう言うよね」

くひひ、と短く笑う。

「眼鏡っ娘は眼鏡かけたまま頂きたい、
ってやつでしょ？ 仕方ない。付き合うよ」

モエは世間話を続けながらも、
時々「ん、っ」と喉を鳴らす。

「また出したい感じ？」

先に言われる。

「いいよ。中で。湯船だから後始末楽だし」

腰を浅く動かし、奥で放つ。

びゅるっ……!!

びゅるるっ……!!

湯の中で精液が広がり、白い濁りが二人の間を漂う。

「お風呂から出たら、ベッドで続きしよ。」

脱衣所から数えたら、もう何発目か分かんないけど」





